

会名変更と改題を中心にして

倉橋惣三

私が当時の「婦人と子ども」に寄稿し、つゞいて編輯を引受けるようになったのも随分古いことであつた。そして、相当力をも尽し、時とするとい冊の雑誌を殆んど全部自分で書くといふやうなことも一度ならずあつた。但し、之れは、編輯者として原稿を集める努力が足りないで、机の上で其の埋め草を書いた訳で、勉強といふよりも寧ろ不精の罰であつたのであるから決して自慢にはならないが、兎に角く、お蔭で、幼稚園教育に関する筆の仕事は多少させて貰ふことが出来たのであつた。先年小著「幼稚園雜草」を出版するに当て

附屬幼稚園の方々が親切にも此雜誌から清書して下さつた分量は可なりかさ高いもので、折角くのお骨折りを無駄にして済まないと思ひつゝ、其の一部分しか版にしなかつた程であるが、それにしても、一つの雑誌に、よくも斯う沢山の分量を書かせて貰つたものだと、其の時自分でも呆れた位であつ

た。その分量だけ多い執筆が、読者の為は何の役に立つたとも思はないけれども、自分の為、いゝ稽古台になつたことは、深く感謝して居るところである。

そんな訳で、其の頃は、此の会と雑誌とを、まるで自分のものでもあるかのような親身の氣で一切をやつていたのであるが、そうなると熱心の余りいゝ／＼のことも考へ出すもので、会の名と、雑誌の名とについて、何だか更新の必要があるように思ひ出したのであつた。それも変更の為の変更といふような氣まぐれではなかつたと今でも信じてゐるが、何しろ、会と雑誌の名が始めて定められた時とは時代も移つて來てゐるので、そんなことが自然私の心に起つたものと思ふ。殊に、其の頃は私もまだ若かつたし、一体我國の幼稚園教育が、いつまでもフレイベルの名を本尊として行はれなくてもよからう。フレイベルは歴史的に幼稚園の創始者として永く

尊敬しなければならぬ。しかし、今日の世界の幼稚園は、従つて我國の幼稚園も、現代の教育精神と教育原理によつて行はれてゐるもので、フレイベルによつて行はれてゐるものではない。今日の幼稚園はどこまでも我等の幼稚園である。

といふやうな気持ちに力味かへつてゐたもので、(今日でも勿論同じ考へであるが)——だからフレイベル会の会名を変へなければならぬといふ狭い理窟の筋合になると定つたものではなかつたかも知れないが、少くとも、日本の幼稚園の協会といふものが無ければならぬとは強く思ひ立つて居たのであつた。それで、若し私にもつと大きい力があるならば、此の光輝ある古い歴史をもつフレイベル会の名は其のまゝ存続させて、別に、新たに一つの幼稚園協会を創立したらといふ風のこと、切実に考へもし、また人にも意見をきいて見たりした。しかも、その事情と、私の微力とが、そういふことを六かしいと思はせ、又そんなことをして、万一フレイベル会の名だけ存して実を空しくするようなことがあつては、義理に即して却つて忠実を欠く恐れもあるといふようなことを考へたりして、新協会創立をやめて、会名を変更すること私の心だけの問題としては考へたのであつた。私は、どち

らかといへば、古きを捨て難い、一種尚古型のところのある性質で、改革とか、更新とかいふ威勢のいふことは向かない方であり、今でさへ、あの時、フレイベル会の名を存して置いた方が、矢張りよかつたのかしらと、思ひ切り悪く思ひ出すことがあり、現に、ロンドンのフレイベル協会を訪問した時など、ひとりで何だか胸さわぎを感じて、日本にも嘗てはフレイベル会があつたが……と後は口の中でもぐぐぐ、誰れにといふことのない言ひ訳けめかしい言葉をいつたりした様の人間で、あの当時、そう自分の心を決めるまでには、どんなに心の中で悩んだものか知れない。

雑誌の名に就ては、これよりも簡単な問題で、会が機関誌の名称を變へることは世間にも珍らしくない。それに、「婦人と子ども」といふ名称が、我國の幼稚園教育の発展と充實を使命とし、職分とする雑誌として、聊か漠然に過ぎ、明確なる標識を欠くことは、当時何人も気がついて居たことであつたのである。殊に、之れも若かつた私だけの考へとして、は、一体(若い時は誰れでもよく直きに、一体をいふものです)「婦人」と「子ども」を一つ並にいつしよにするのはよろしくない。おん、な、こ、ど、も、といふ我國在来の旧い言葉には、

婦人をも、子どもをも軽侮したような怪しからぬ見方がある。子どもの為を思ふのは、婦人の大事な天分ではあるが、決して婦人に限つたことではない。どうも、此の名称「婦人と子ども」のまゝでは、幼稚園の問題に大いさと、重さとの連想することが出来難い。もつと堂々でなくとも幼稚園教育の雑誌として、端的明瞭に其の使命を表示する名称にしなければならぬと考へたのである。詰り、従来はやゝ通俗的な名称から専門的教育雑誌にしなければならぬと、之れは会名変更の問題よりも前からひとり力で力味かへつてゐたことであつた。

自分の心の中ではそう考へても、会として重大な問題であり、第一、会長、主幹の意見を俟たなければならない。当時主幹は安井哲子女史で、別に反対もせられなかつたが、当時の会長中川謙次郎氏は、もう少し考へてといふ御意見であつた。フレールベル会なり、「婦人と子ども」なりの創めから間指直接いろ／＼の御関係が深かつた上に、其の慎重な御性格からは極めて無理からぬことゝ思つたので、其の時は其のままにして、従来そのままの会の活動なり、雑誌の内容なり益々充実発展させることにつとめた。ところが其の後、私が主幹

となり、よかれ悪しかれ、責任を正面に負ふことが出来るやうになつたので、悪かつたら一切自分で責を負ふといふ心で、当時の会長湯原元一氏に総ての意見を申し出た。会長としては、それが会の為に実質的に多少ともよいことであり、又会員諸君に於て異議がないならば、実行してもよからうといふお話であつたので、更に幹事諸君（それは会長に謀る前に寄々相談してあつたが）と協議し、大正七年十二月十四日臨時總會を開いて、此の事を議題とし、満場異議なく可決せられた次第であつた。押し迫つた十二月に臨時總會を開いたのは、愈々実行するとなれば年の中途でなく、一月号からした方がいゝといふ為であり、而して翌大正八年一月から会名を日本幼稚園協会と更め、同時に雑誌の名を「幼児教育」と更め、爾來今日に至つてゐるのである。

前にも申した通り、此の変更は、呉々も、徒に新らしきを好む、変更の為の変更ではなかつた。我國の幼稚園教育の発展を通観して、その中心活動の一機関としての本会の職責を名実共に一層意義あらしめようといふ心願からであつた。尚ほ又、当時、私の一つの希望であつたところの、万国幼稚園協会への加入の為には、我が国を其の名に於て、代表する協

会として置いた方がいゝといふ考へもあつたのであつた。之れは、今日未だ実現せられてゐないが、其の機會の来た時に、日本幼稚園協會の名は都合がいゝと思つて居るのである。雑誌の方に就ては、其の主眼目を幼稚園におくことは勿論であるけれども、敢て幼稚園のみに限らず、社会事業の方面でも、社会教育の方面でも、家庭教育の方面では勿論、要するに、幼児期教育の全方面に向つて、其の問題を含有させる必要があるを信じて、特に幼稚園雑誌とせず、幼児教育といふ広い名称を撰んだ訳であつた。

但し、此の改称がよかつたかどうかは、いろいろの違つたお感じもあることと思ひ得る。殊に、我国幼稚園教育の始期に當つて、よく其の指導者たる任務をつくし、貢献するところ大なりしゆいしよある名称に対して、その存在をつゞけさせなかつたことは、今でも遺憾の感がないではない。勿論、其の時の心は全く上述の通りであつて、先人の志を尊重し、本会の古き歴史的光輝を益々高揚させる為に他ならなかつたので、其の点は今にして何等の悔も思はないが、古きを偲ぶ心に於ては、誰でも惜しい感じを去ることは出来ないのである。殊に、幼稚園創始者としてのフレイベルの名を記念する

会が其の為に我国に無いことになつた点は、其の意味に於て頗る惜しい。私がフレイベル会の名称変更を主唱したからといつて、フレイベル其人に対する史的敬意をもたないといふ訳では決してなく、それは、今此の文を草しつゝある私の書齋に、現にフレイベルの肖像を掲げてあることでも分つて貰へると信ずるのであるが、たゞ、当時の（而して今日も同じく）私の心は、そうした懐古の心よりも、現在と将来との我國の幼児教育のことで一杯であつただけである。

その頃は若かつたしと私は言つたが、今でもまだ、自分の昔話をする程に老いてはゐない筈である。しかも、こんな話を長々と書いたのは、三十年記念号といふ目出度い本誌上に於て、本会と本誌との光榮ある旧名称を今更に追憶し、その旧名に対しては敢て自ら忍ぶべからざるを忍んだ当時の私の心持を叙して、更めて旧名称にゆるしを乞はんとするのである。